

2020年度三重県におけるイサキの資源評価

笹木大地

Stock assessment of *Parapristipoma trilineatum* in Mie Prefecture in fiscal 2020

DAICHI SASAKI

キーワード：イサキ，大型定置網，一本釣り，資源評価，標準化 CPUE

大型定置網におけるイサキの漁獲量から資源水準は「低位」、同漁法の標準化 CPUE の直近5年間の推移から動向は「減少」と判断された。

生態

1 分布・回遊

イサキ *Parapristipoma trilineatum* は新潟県から九州南岸の日本海，東シナ海，宮城県から九州南岸の太平洋，伊豆諸島，瀬戸内海，屋久島，朝鮮半島南岸，済州島，台湾，福建省，広東省（島田 2013），ベトナム北部（Kimura 2018）に分布する暖水性，外海沿岸性の魚類である。日本産と中国産の間では形態に差が見られるとされており（Yokogawa 2000；吉松・光永 2000），両者は遺伝的にも異なる個体群とされている（Kumagai et al. 2004）。県内では伊勢湾口-熊野灘の主に水深 80m 以浅の岩礁域に生息する（木村 1987）。伊勢湾には少なく，未成魚が見られる程度である（木村 1987）。大規模な回遊は行わず，季節的に局所的な向岸一向沖移動は行っていると考えられている（木村 1987）。しかし，イサキは産卵期に定置網でまと

まって漁獲されており，このような魚種にはブリ（久保田 2019），イシダイ（河尻 1979）などがあげられ，これらは産卵に伴って大規模な回遊をすると考えられている。イサキもこれらの魚種と同様に比較的大きな産卵回遊をしている可能性も考えられる。

2 年齢・成長

成長には雌雄差はない（木村 1984）。加齢月を熊野灘の産卵開始時期である6月とし，耳石の表面観察による年齢査定結果からは，満1歳で尾叉長 11 cm 前後，満2歳で 17 cm 前後，満3歳で 22 cm 前後，満4歳で 25 cm 前後，満5歳で 28 cm 前後，満6歳で 30 cm 前後，満7歳で 31 cm 前後に成長する（木村 1984）。年齢査定は各海域で行われており，その一覧を表1に示す（Doiuchi et al. 2007；山田ほか 2011 を改変）。熊野灘と三浦半島，静岡県，山口県，五島列島ではおおむね成長速度は等しく，紀伊半島南西部，徳島県，豊後水道西部より成長は遅い。山田ほか（2011）は生息する海域によって成長速度が異なることを示唆している。

中国産は日本産よりも成長が速いとされており（吉松・

表1 イサキの海域別の尾叉長と年齢の関係（Doiuchi et al. 2007；山田ほか 2011 を改変）

海域	年齢別尾叉長 (cm)									査定部位	文献
	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
三浦半島	12.2	17.7	21.8	24.7						鱗	増沢 (1967)
静岡県	11.9	18.5	23.5	27.2						鱗	佐藤 (1971)
熊野灘	11.0	17.2	21.8	25.2	27.9	29.8	31.3			耳石 (*1)	木村 (1984)
紀伊半島南西部	16.6	20.6	23.7	26.0	27.8	29.1	30.1	30.8	31.4	耳石 (*2)	Doiuchi et al. (2007)
徳島県	15.0	22.1	26.1	28.7	30.7	32.6	34.3	35.6	36.5	耳石 (*1)	渡辺・岡崎 (1999a)
山口県	12.9	18.4	22.8	26.3	29.0	31.1	32.0			鱗	河野 (1997)
豊後水道西部	16.8	23.8	27.6	29.6	30.7	31.3	31.6	31.8	31.9	耳石 (*2)	山田ほか (2011)
五島列島	12.7	17.8	21.9	25.3	28.1	30.3				鱗	川口・山元 (1990)

*1：耳石表面観察による年齢査定

*2：耳石横断切片による年齢査定

光永 2000), 中国産種苗を導入して国内で養殖されている (Kumagai et al. 2004)。養殖の生産量は愛媛県, 高知県, 熊本県, 長崎県であり, 三重県でもわずかに養殖されている (全国海水養魚協会ホームページ: 2020 年 12 月 7 日 <https://www.yoshoku.or.jp/isaki/>)。

本研究において 2016–2020 年に調査した結果から得られた尾又長—体重関係式を図 1 に示す。この関係から尾又長 20cm で約 120g, 25cm で 240g, 30cm で 420g, 35cm で 670g となる。

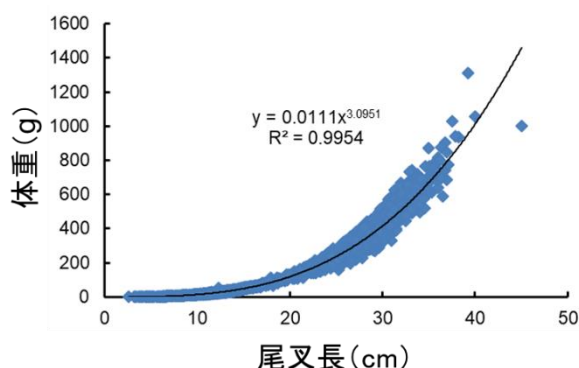


図 1 2016–2020 年の調査で得られたイサキの尾又長と体重の関係

3 成熟・産卵

熊野灘における成熟個体は, 生殖腺指数 (GI) = 生殖腺重量 (g) $\times 10^4$ / 尾又長 (cm) 3 がメスで 2 以上, オスで 1 以上である (木村 1987)。成熟率はメスでは 2 歳 43%, 3 歳 95%, 4 歳以上 100%, オスでは 2 歳 83%, 3 歳以上 100% とされ, 組織学的検討から生物学的最小形はメスで尾又長約 16cm, オスで約 15cm と考えられている (木村 1987)。産卵は分離浮性卵を多回産卵し, 熊野灘における産卵期は 6–8 月であり, 産卵盛期は 6–7 月と推定される

(木村・鈴木 1981 ; 木村 1987)。

本研究において 2020 年 5–7 月にかけて生殖腺重量を測定したところ, 5, 6 月における尾又長 20cm 以上では, 雌雄いずれも, GI は木村 (1987) が示した成熟の目安より高い値となった (図 2)。7 月はオスで概ね目安以上となったが, 5, 6 月に比べると GI は大きく低下し, メスでは成熟の目安を下回る個体が多くを占めた (図 2)。15cm 前後の小型個体では 5, 6 月にオスの一部で成熟の目安を上回り, メスは 17cm 以上の個体では目安を上回る個体が出現した (図 2)。7 月の調査日は 7 月 31 日であり, 産卵期の終盤であることにより GI が低かったと考えられた。2020 年の調査からは産卵期は 5–7 月と推定されたが, 8 月以降は調査ができず結果は不明である。

4 被捕食関係

三重県のイサキの食性については木村 (1981) によって報告されている。稚魚・幼魚では未成魚・成魚に比べ甲殻類を捕食する割合がかなり大きく, 稚魚期には魚類を捕食せず, 幼魚期以降に捕食する。稚魚期にはカイアシ類, 二枚貝幼生, 鰓脚類を捕食する。若魚期にはこれに加えてヤムシ類, 尾索類, カタクチイワシのシラス期仔魚などを捕食する。未成魚・成魚は魚類を最も多く捕食し, 次いで甲殻類が多く, その他の動物の割合はかなり少ない。魚類では, キビナゴ, マイワシ, カタクチイワシなどのイワシ類を年間通して多く捕食し, これらのイワシ類はシラス期仔魚から捕食する。また, 春にはマジやサバ属を捕食し, 秋にはこれら以外の仔稚魚を捕食する。甲殻類ではカイアシ類, ヨコエビ類やワレカラ類といった端脚類などを捕食する。長崎県平戸島志々伎湾では, 標準体長 1–4cm の小型個体はアミ類とカイアシ類, 7–16cm まではヨコエビ類, 多毛類, 貝虫類が多く, 体長が大きくなるとアミ類が増加し, 22cm 以上になると魚類

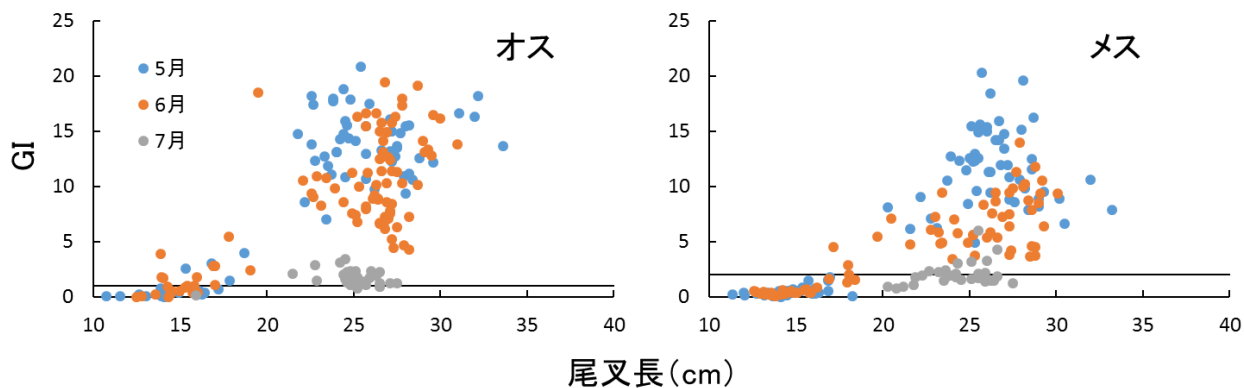


図 2 2020 年のイサキの月別雌雄別成熟度 (左: オス, 右: メス)。横線は木村 (1987) による成熟度の目安 (オス: 1 以上, メス: 2 以上)

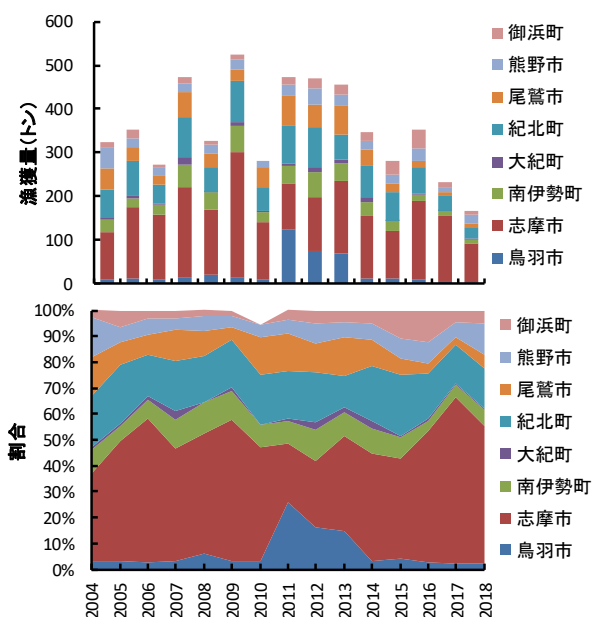


図3 漁業・養殖業生産統計年報によるイサキの市町別漁獲量（上）と市町別漁獲量の割合（下）

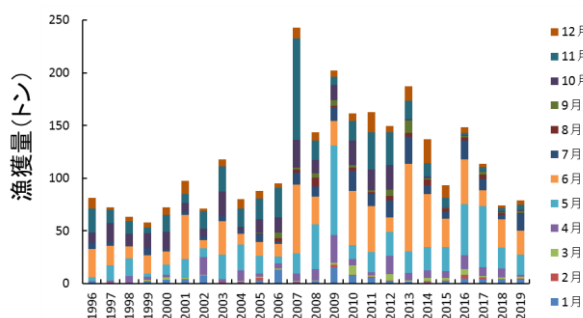


図5 三重県ブリ定置漁獲統計によるイサキの月別漁獲量



図4 三重県におけるイサキの主要水揚げ港および漁場

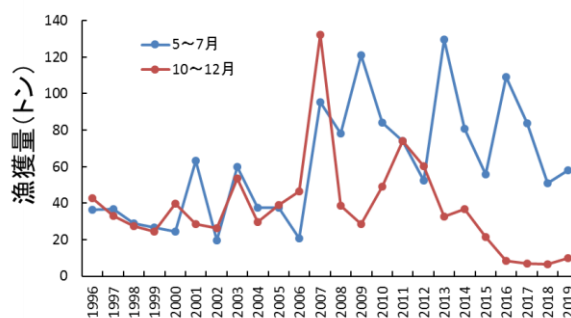


図6 三重県ブリ定置漁獲統計によるイサキの主漁期（5-7月と10-12月）における漁獲量

（カタクチイワシ）が多くなる（松宮・高橋 1983）。

本研究における調査では、熊野灘沿岸の定置網で漁獲された若齢魚（尾又長 18cm 未満）の胃内容物からは、ワレカラ類が多く出現した。ただし、海域による差が大きく、贄浦、奈屋浦に水揚げされた個体からの出現率は高いが、波切に水揚げされた個体からの出現は稀であった。一本釣りで漁獲された成魚では撒き餌が胃内容物の大部分を占めていたが、カイアシ類やアミ類の出現も見られ、定置網では空胃率が高い。成魚の調査数は限られているが魚類の出現は少なく、木村（1981）の結果とは一致しなかった。

定置網で漁獲されたブリの胃内容物から未成魚が出現することがあるが、消化されておらず、揚網中に捕食されたものと推察される（笹木 未発表）。それ以外では被食に関する情報は無い。

漁業の状況

1 漁業の概要

2004-2017 年における市町別の漁獲量および比率を図 3 に示す。期間中の漁獲量は 300 トン前後で比較的安定しているが、2007-2012 年は 400 トンを超える年が多い一方、2016 年以降は減少傾向で 2017 年は 200 トンを下回っている。漁獲量は志摩市が多く、県全体の 23-64% を占め、多くの年で 40% 以上を占めている。次いで多いのが紀北町で県全体の約 20% を占める。鳥羽市は概ね 5% 未満であるが、2011-2013 年にかけて 15-23% と高い割合であった。当時の鳥羽磯部漁業協同組合が集計している水揚げ量はその他の期間とほぼ同様の 10 トン前後であったため、漁協を経由しない漁獲によるものと推察される。漁獲が多い志摩市と紀北町では大型定置網および一本

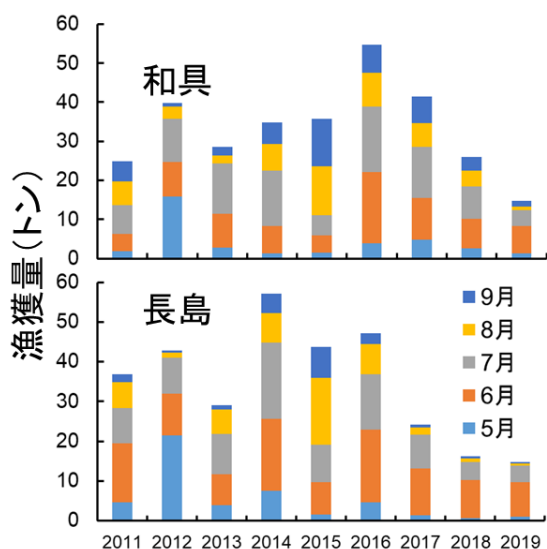


図7 一本釣りによるイサキの月別漁獲量
(上：和具，下：長島)

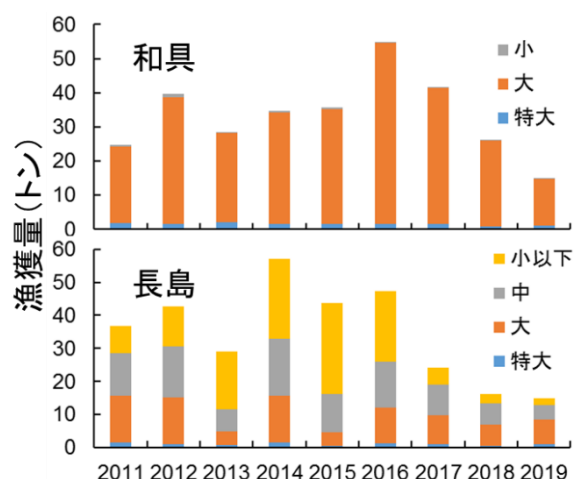


図8 一本釣りによるイサキの地区別銘柄別漁獲量
(上：和具，下：長島)

表2 三重県におけるイサキの銘柄組成

地区	片田	和具	和具	長島
漁法	定置網	定置網	一本釣り	一本釣り
区分	尾叉長	尾叉長	眼窩中央下端又長	体重
ピリ下	16.0cm 未満	—	—	*2
ピリ	16.0-19.2 cm	18.0 cm 未満	—	150-199 g
小下	—	18.0-21.0 cm	—	—
小	19.2-22.2 cm	21.0-23.7 cm	—	200-299 g
中	22.2-25.4 cm	23.7-26.5 cm	17.2 cm 以下 (*1)	300-399 g
大	25.4-30.4 cm	26.5-30.4 cm	17.2-25.9 cm (*1)	400-599 g
特大	30.4 cm 以上	30.4 cm 以上	25.9 cm 以上 (*1)	600 g 以上

*1 換算尾叉長 18.9 cm 未満が小，18.9-28.4 cm が大，28.4 cm 以上が特大

*2 長島地区の一本釣りでは 2015 年 10 月以降 150 g 未満は放流

釣りの漁獲が大部分を占める。それぞれの主要漁場は図4に示したとおりで、大型定置網の漁獲量は志摩市片田、和具、南伊勢町贅浦、紀北町島勝で多く、一本釣りは志摩市波切、和具、紀北町長島が多い。

大型定置網では5-7月と10-12月に盛漁期があるが、2016年以降は10-12月の漁獲量は少ない(図5, 6)。一本釣りの漁獲が多い、和具地区、長島地区のいずれにおいても、漁獲のピークは6-7月であり、漁期はおおむね5-9月である(図7)。

主要な水揚地におけるイサキの銘柄分けを表2に示す。名称はそれぞれ異なるが各地で銘柄は細かく分けられている。片田漁場と和具漁場の定置網では尾叉長により銘柄が分けられており、和具地区の一本釣りの銘柄は眼窩中央部下端と尾鰭の切れ込み部分の長さで分けられている。特大の中でさらに大型のものは特上となるが、漁獲の大部分は大である(図8上)。長島の一本釣りの銘柄は

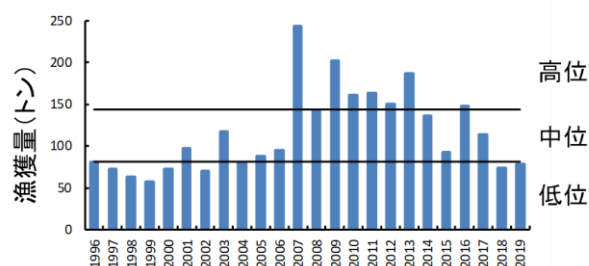


図9 三重県ブリ定置漁獲統計によるイサキの漁獲量。1996-2004年の8月、9月は未集計。横線は高位と中位、中位と低位の境界線を示す

体重で分けられており、150g未満は放流されている(図8下)。

2 漁獲量の推移

1) 定置網

三重県ブリ定置漁獲統計における、1996-2019年(ただし、1996-2004年は8月、9月は未集計)のイサキの年別漁獲量を図9に、月別漁獲量を表3に示す。1996-2006年は2003年を除き100トン未満で推移していたが、2007年に243トンと急増した。その後2016年までは150トン前後の漁獲量で安定していたが、その後減少に転じ、2018年は74トン、2019年は79トンとなった。月別では5月、6月に多く、7月も比較的多い。2015年以前は10、11月にも多い。漁獲の急増した2007年には11月だけで96トンの小型魚が漁獲された(三重県水産研究所 2008)。2016年以降は10-12月の漁獲量は少ない。

表3 三重県ブリ定置漁獲統計におけるイサキの漁獲量

年/月	単位トン												年計	5-9月	10-12月
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
1996	2	0	0	0	3	27	6			10	23	10	81	36	43
1997	1	0	0	2	14	19	4			18	12	3	72	37	33
1998	0	0	0	7	16	12	1			11	12	4	64	29	27
1999	2	1	1	3	3	18	6			14	6	4	58	27	24
2000	3	0	2	2	10	13	2			16	16	8	72	25	40
2001	3	1	1	1	18	42	3			8	8	13	97	63	29
2002	7	0	1	16	9	8	3			7	17	2	71	20	26
2003	1	0	0	3	23	31	5			23	24	7	118	60	54
2004	1	1	0	10	25	10	3			4	17	9	80	38	30
2005	3	3	1	3	17	13	8	1	1	12	20	7	88	39	39
2006	13	0	1	5	7	12	2	4	5	14	28	4	95	29	46
2007	1	1	1	7	19	66	11	3	2	26	96	10	243	101	132
2008	2	0	1	11	42	26	10	8	4	13	18	8	143	91	39
2009	15	2	2	26	85	23	13	1	5	15	8	6	202	128	28
2010	8	0	9	6	13	52	19	3	2	24	18	7	161	89	49
2011	5	1	1	3	19	44	11	2	2	19	36	19	163	78	74
2012	2	1	6	17	23	13	16	4	7	23	31	6	150	63	60
2013	1	0	1	7	21	83	26	3	12	1	18	14	187	145	33
2014	1	1	3	7	22	50	8	5	1	1	13	22	137	87	37
2015	2	1	2	7	23	27	6	3	1	1	9	12	93	59	22
2016	5	3	6	13	48	43	18	3	1	1	3	5	148	113	8
2017	4	1	2	8	58	15	11	4	3	0	4	3	114	91	7
2018	4	1	2	9	20	27	4	2	0	2	2	3	74	53	7
2019	3	1	2	2	19	22	16	1	2	1	5	4	79	60	10

*1 1996-2004年の8月, 9月は未集計

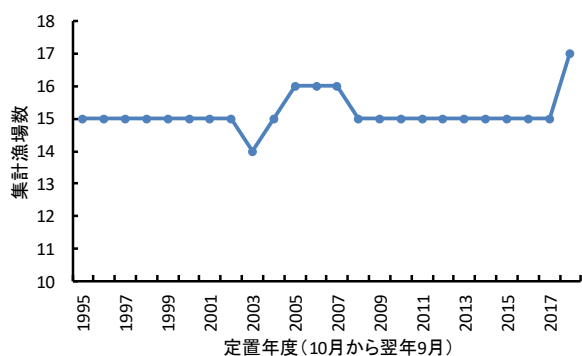


図10 三重県ブリ定置漁獲統計における集計漁場数の推移

2) 一本釣り

三重外湾漁協の漁獲データによれば、和具では2016年にかけて増加し、その後減少している(図7上)。長島は和具とは異なり、2014年が最高で、2017年に漁獲が急減した(図7下)。両者とも漁獲盛期は6月と7月であり、2012年はいずれの地区でも5月の水揚げが多かった。

3 漁獲努力量

1) 定置網

三重県ブリ定置漁獲統計における年度別(10月から翌年9月)の集計漁場数を図10に示す。大型定置網の経営体数は比較的安定しているため、大きな変化はないと考えられるが、比較的イサキの漁獲が多かった志摩市の志島漁場が2015年の1月をもって休業し、さらに鳥羽市相差漁場が2016定置年度(2016年10月-2017年9月)で休業した。三重県ブリ定置漁獲統計では2015定置年度か

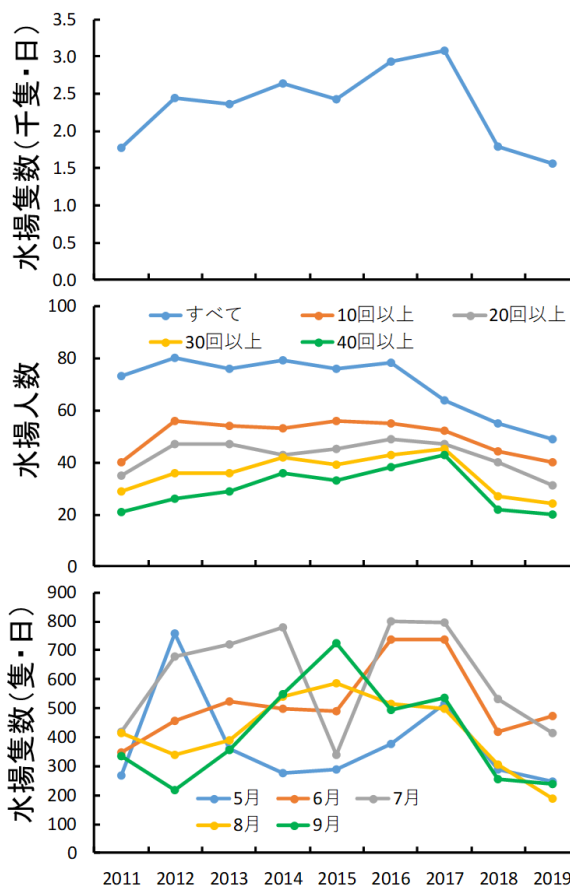


図11 和具地区の一本釣りにおいて、イサキを水揚げした隻数(上)、水揚げした人数(中)、月別の水揚げ隻数(下)

ら紀北町長島漁場、2016定置年度から志摩市波切漁場を集計漁場に加えたため、集計漁場数に変化は見られず、15ヶ続であったが、2018定置年度に2ヶ続増えて17ヶ続となった。なお、この2ヶ続は新規に操業開始した漁場ではなく、これまで集計していなかった漁場である。

2) 一本釣り

和具地区の5-9月の水揚げ隻数は2011年(約1,800隻)から2017年(3,100隻)にかけて増加したが、その後大きく減少し2018年、2019年は約1,700隻となっている(図11上)。0キャッチ(出漁したにもかかわらず、イサキが水揚げされなかったときのこと)のデータは含まれないが、イサキを狙った操業で0キャッチはごくわずかであると考えられる。イサキを1回でも水揚げした人数は2016年までは80隻弱で推移し、それ以降は減少し50人程度に減少した(図11中央)。水揚げ回数別の集計では

水揚げ回数が30回以上の人数は2017年にかけて増加し、2018年に大きく減少した(図11中央)。月別の水揚げ隻数は2015年7月を除き6月、7月が多い。(図11下)。5月は2012年、2017年に多く、5月の漁獲量と概ね比例する(図7上;11下)。8月、9月は2014-2017年に多く、以後減少している(図11下)。

長島地区の一本釣りでは2020年に約30隻が操業しており、カツオ釣り、はえ縄(ハモ、アマダイ類)等と兼業している。5月から6月にかけて20隻余りが操業しているが、その後は漁獲動向によって操業船が減少し、漁期の終盤となる10月末には10隻程度の操業となる。土曜日を除く市場休みの日の操業は認められており、休み明けの日には2日分が水揚げされる。5-9月の水揚げ隻数は2011-2016年にかけては2,000隻以上であったが、2017年に1,500隻に減少し、2018年と2019年は1,000隻程度に減少している(図12上)。ここには0キャッチのデータは含まれないが、和具地区と同様に0キャッチはごくわずかであると考えられる。イサキを1回でも水揚げした人数は2017年までは50-60人で推移し、それ以降は40人程度に減少した(図12中央)。水揚げ回数別でも増減の傾向は同様である(図12中央)。月別の水揚げ隻数は6月、7月が多く、全体を通じた水揚げ隻数や水揚げ人数の傾向とよく似ている(図12)。5月は2012年に多く、5月の漁獲量と比例する(図7下;12下)。8月、9月は2014-2016年に多く、以後減少している(図12)。

4 資源管理

長島地区の撒き餌を用いた一本釣りは5月1日から10月31日に漁期が制限されており、操業時間は日の出から11時30分までと決められている。また、2015年10月に改訂された長島地区の資源管理計画には体長18cm未満を放流すると記載があり、三重外湾漁協長島事業所への聞き取り結果から、150g未満の個体は放流されている。なお、体長が標準体長である場合の換算尾又長は約21cmとなり(笹木 未発表)、体重では約140gとなる(図1)。

5 種苗放流

水産研究・教育機構が毎年発行している栽培漁業・海面養殖用種苗の生産・入手・放流実績(全国)によると、2001-2008年に長島地区で人工種苗2.0-14.3万尾(2002年は放流なし)が放流されていたが、その後は放流されていない。

資源評価

1 方法

表4. 資源評価に使用したデータセット

データセット	基礎情報, 関係調査等
漁獲量・資源量 指数	三重県ブリ定置漁獲統計(1994年度-) 三重外湾漁協漁獲データ(2011年-) 漁業・養殖業生産統計年報(2004年-) 市場測定データ(2017年-)

1) 資源水準と資源動向

長期の資料が残り、さらに努力量に大きな変化が見られない大型定置網漁業の漁獲量を集計した三重県ブリ定置漁獲統計におけるイサキの漁獲量を使用し資源水準を評価した。過去23年間(1996-2018年)の漁獲量の第一3分位点(81トン)を低位と中位,第二3分位点(143トン)を中位と高位を区分する基準値として判断した。資源の動向には三重県ブリ定置漁獲統計を用いた標準化CPUEの推移を用いた。標準化には一般化線形モデルを

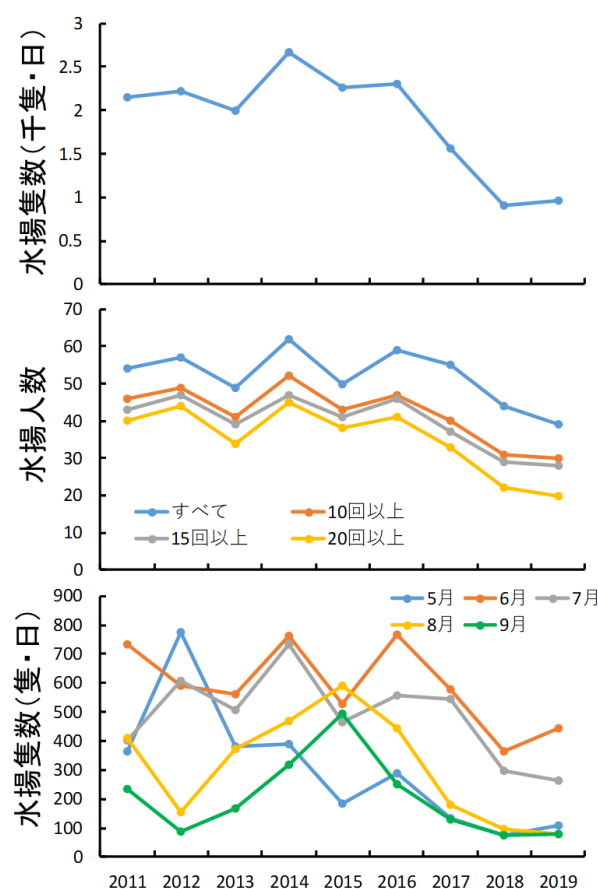


図12 長島地区の一本釣りにおいて、イサキを水揚げした隻数(上)、水揚げした人数(中)、月別の水揚げ隻数(下)

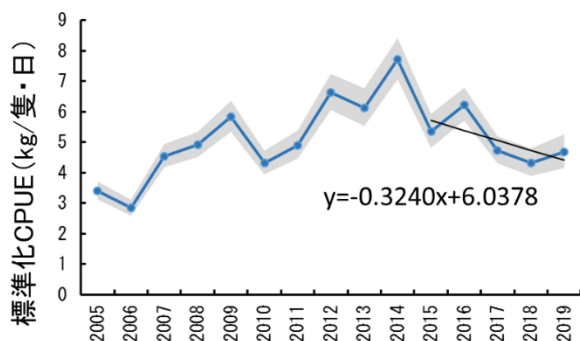


図13 ブリ定置漁獲統計におけるイサキの標準化CPUE。上下の範囲は95%信頼区間を示す

用いた。初期モデルとして応答変数を漁獲重量に微小値として1を足した値の対数を、説明変数として年、月を固定項として、漁場をランダム項として入れ、交互作用として年と月を設定した。応答変数は正規分布に従ってばらつくと仮定し、AICを用いて全パターンを比較して変数の選択をした。その結果、最適モデルとして、年、月、漁場、年と月の交互作用を説明変数とするモデルが選ばれた。このモデルを用いた年の最小二乗平均を標準化CPUEとして資源の動向を見る指標として用いた。

定置網漁業と同程度の漁獲がある一本釣りについては、使用できる資料が2011年以降と限られていることや近年努力量が減少していることから、定置網に比べCPUEの精度が低下すると考えられるため、三重外湾漁協和具地区および長島地区の一本釣りの漁獲量やCPUEは参考値とする。和具地区は漁獲物の大部分が大銘柄であり(図8)、銘柄別漁獲量は使用できないため月別漁獲量を日別水揚げ数から算出したCPUEを算出した。長島地区では和具地区と同様の方法でCPUEを算出し、銘柄別漁獲量が細かく整備されているため、合わせて銘柄別CPUEも算出した。

2) 漁獲物の年齢構成

年齢査定は一部を除いて実施できていないため、銘柄別漁獲量や市場測定データから漁獲物の年齢を推定した。定置網では漁獲量が多い片田漁場と和具漁場の5-9月における銘柄別漁獲量を整理した。また、イサキは漁獲物の大きさによって単価が大きく異なるため、月別の単価の頻度分布図を作成し、漁獲物の組成について検討した。一本釣りは銘柄別漁獲量が整理されている長島地区のみについて検討した。2017年以降に市場調査において測定した尾又長組成からも漁獲物の年齢を検証した。

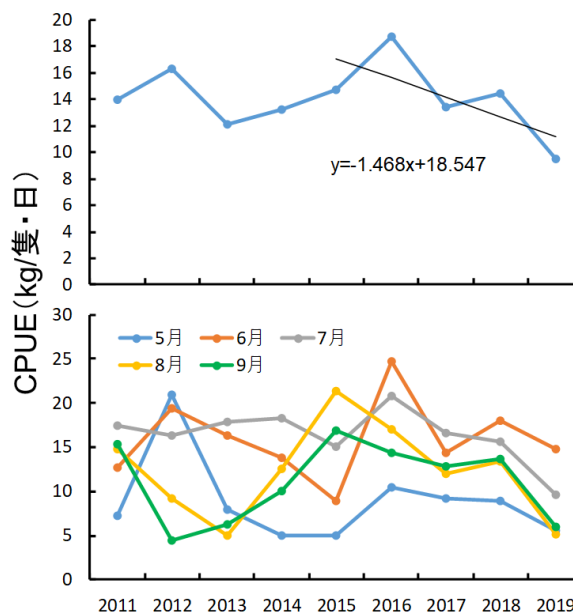


図14 和具の一本釣りで漁獲されたイサキのCPUE(上)と月別CPUE(下)

2 結果と考察

1) 資源水準と資源動向

① 定置網

1996-2004年まではおおむね低位水準で推移したが、2007年に急増し高位水準となり、その後は3、4年周期で増減を繰り返しながら高位と中位水準を行き来し、2018年に減少して低位となった。2019年における漁獲量は78トンであり、第一3分位点(81トン)を下回ったことから、資源水準は低位と判断した(図9)。

ブリ定置漁獲統計におけるイサキの標準化CPUEは長期的には2005-2014年にかけて増加し、その後減少している(図13)。同統計の直近5年間(2015-2019年)の標準化CPUEの回帰直線の傾き-0.32を中間年(2017年)の推計値5.07 kg/隻・日で割ると年変動率は-6.3%となることから、資源は「減少」と判断した(図13)。なお、2017年以降ではCPUEは横ばいで推移している(図13)。

② 一本釣り

和具地区の漁獲量とCPUEは同様の傾向で推移している(図8上、14上)。2013-2016年にかけて増加し、その後は大きく減少した。直近の5年間のCPUEの傾き-1.47を中間年(2017年)の推計値14.1 kg/隻・日で割ると年変動率は-10.4%となる。また、月別CPUEでは通常6月か7月にピークが見られる(図14下)。

長島地区の銘柄別漁獲量は図8に示したとおりで、2017年以降、小以下の銘柄が激減している。全銘柄を統

合した年間 CPUE は 2014 年以降では減少傾向となっており、2016 年以降は和具と同様の傾向を示したが、和具とは異なり漁獲量に対する減少は緩やかであった（図 8, 14 上, 15 上）。月別では 6 月、7 月は各年とも高く、5 月は 2012 年、2014 年、2016 年が高く、8 月、9 月は 2015 年にかけて増加後、大きく減少している（図 15 下）。直近の 5 年間の CPUE の傾き -1.06 を中間年（2017 年）の推計値 $17.7 \text{ kg/隻} \cdot \text{日}$ で割ると年変動率は -6.0% となる。月別銘柄別漁獲量と CPUE の推移を図 16 に示す。漁獲量は特大、大は 5 月、6 月に多く、小以下は 7 月以降に多い。

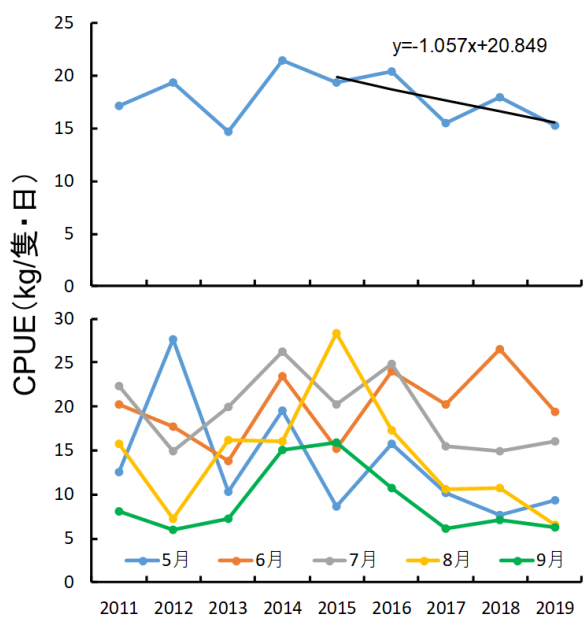


図 15 長島の一本釣りで漁獲されたイサキの CPUE（上）と月別 CPUE（下）

CPUE は特大、大では 2011–2015 年にかけて減少傾向で、それ以降は大きく増加している。中は比較的安定しているが 2018 年以降は減少傾向、小は 2015 年にかけて大きく増加し、2017 年に激減し、以降は低水準となっている。長島では 2016 年から 150g 未満の放流が行われるようになったため、小以下の漁獲量が減少し、結果として CPUE も減少していると考えられる。近年の大、特大の CPUE の増加については、小型魚の保護が影響した可能性もあるが、詳細は不明である。

2) 漁獲物の年齢構成

定置網で漁獲されたイサキの尾叉長組成を図 17 に示す。10–12 月は尾叉長 10cm 前後の 0 歳魚と 15–17cm 程度の 1 歳魚と推定される未成魚が漁獲の中心で、5–7 月は 25cm 以上の大型成魚が漁獲の主体であると推測される。一方、定置網において 5–9 月の漁獲量が多い片田漁場と和具漁場の銘柄別漁獲量を図 18 に示す。片田では 2015 年以降、和具では 2017 年以降、小以下の銘柄の漁獲量は減少し、大から中銘柄の漁獲が大部分を占めている。片田の中銘柄は尾叉長 22.2cm 以上であり、木村(1984)が示した尾叉長と年齢の関係からは 3 歳以上であると推測され、近年の 5–9 月の漁獲物の大部分は成魚であると考えられる。また、月別の単価の頻度分布図（図 19）によれば、5–7 月は 2015 年以降、500 円/kg 以上のことが多いが、10–12 月は 100 円未満/kg が多くを占めていた。このことから定置網における二つの主漁期ではそれぞれ漁獲物は大きく異なると考えられる。成魚の主漁期（5–

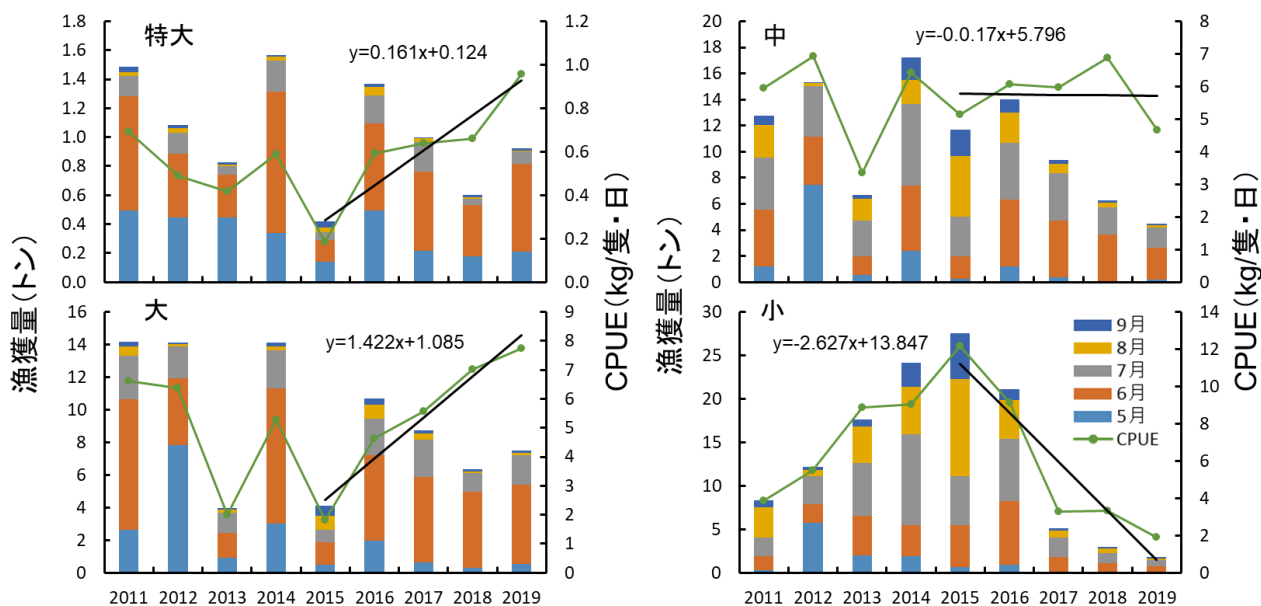


図 16 長島の一本釣りで漁獲されたイサキの銘柄別月別漁獲量と CPUE（特大：左上，大：左下，中：右上，小以下：右下）

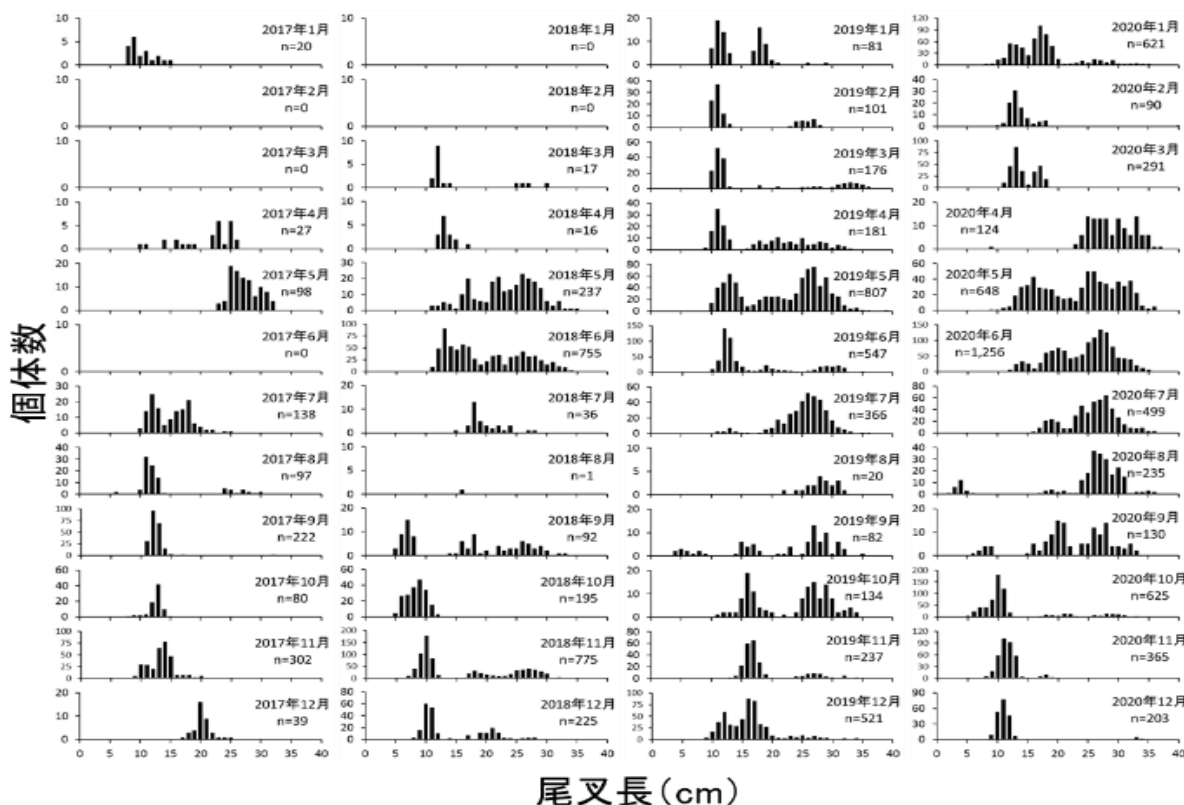


図 17 定置網で漁獲されたイサキの尾叉長組成

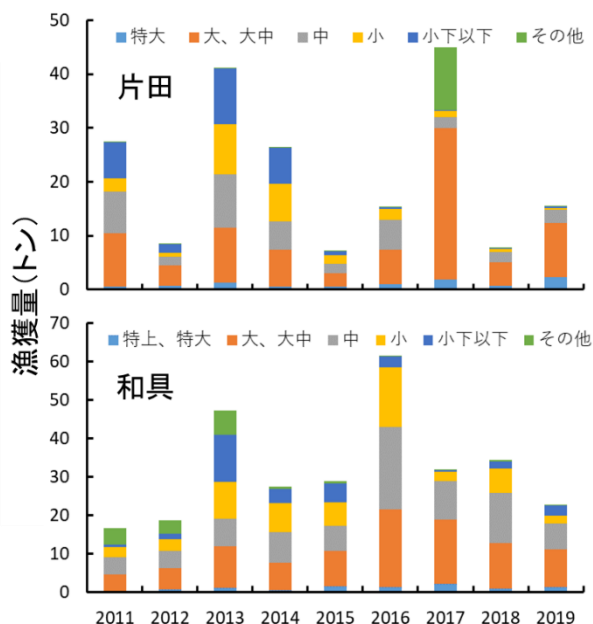


図 18 5-9月における大型定置網2ヶ統の銘柄別漁獲量 (上: 片田, 下: 和具)

7月)と若齢魚の主漁期(10-12月)のうち、5-7月は近年増加傾向にあるが、10-12月は大きく低下している(図6)。5-7月に多い漁場は片田漁場と和具漁場の両漁場であり、10-12月に多い漁場は糞浦、島勝である。以上のことから近年は漁獲物に占める未成魚(0-1歳)の割合が減少し、3歳以上の成魚の割合が増加していると考えられる。

一本釣りでも漁獲されたイサキの尾叉長組成を図20に示す。和具では銘柄からの推定が困難ではあるものの、買い上げ調査と近隣の波切市場における調査からは、20cm未満の割合はごくわずかであり、未成魚の水揚げは少ないと考えられる。長島における小銘柄は200-299gであり、尾叉長に換算すると約23cm以上となる(図1)。近年、小以下の銘柄の水揚げは大きく減少しており、長島では未成魚はほとんど水揚げされていない。

2020年5-7月に漁獲された301個体について、耳石を用いた年齢査定を実施したところ、尾叉長25cm以上では6歳以上の割合が高く、中でも8歳魚(2012年級群)の占める割合が大きかった。また、尾叉長と年齢の関係は4歳以上で大きく重複していた(笹木 未発表)。漁獲主体が高齢魚であることから尾叉長から年齢分解することは不可能であると考えられた。

笹木

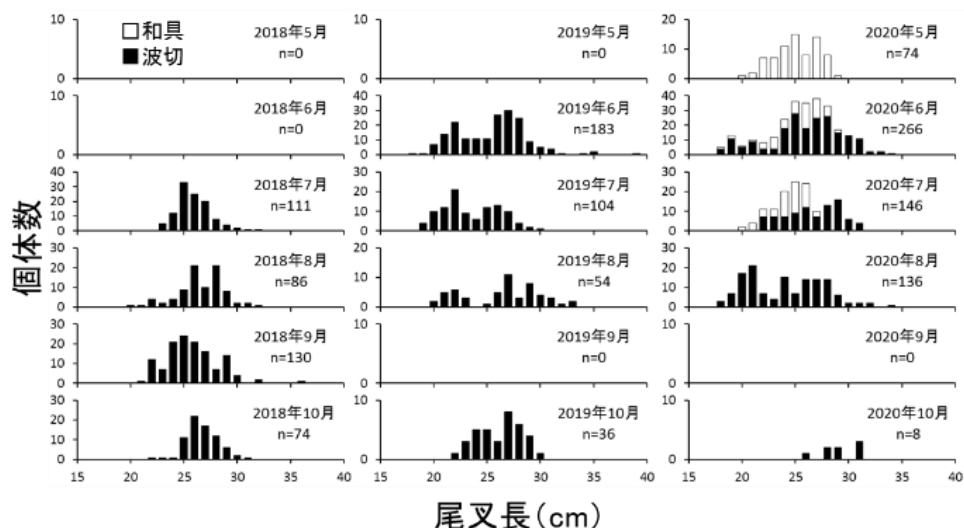


図 20 一本釣りでも漁獲されたイサキの尾叉長組成

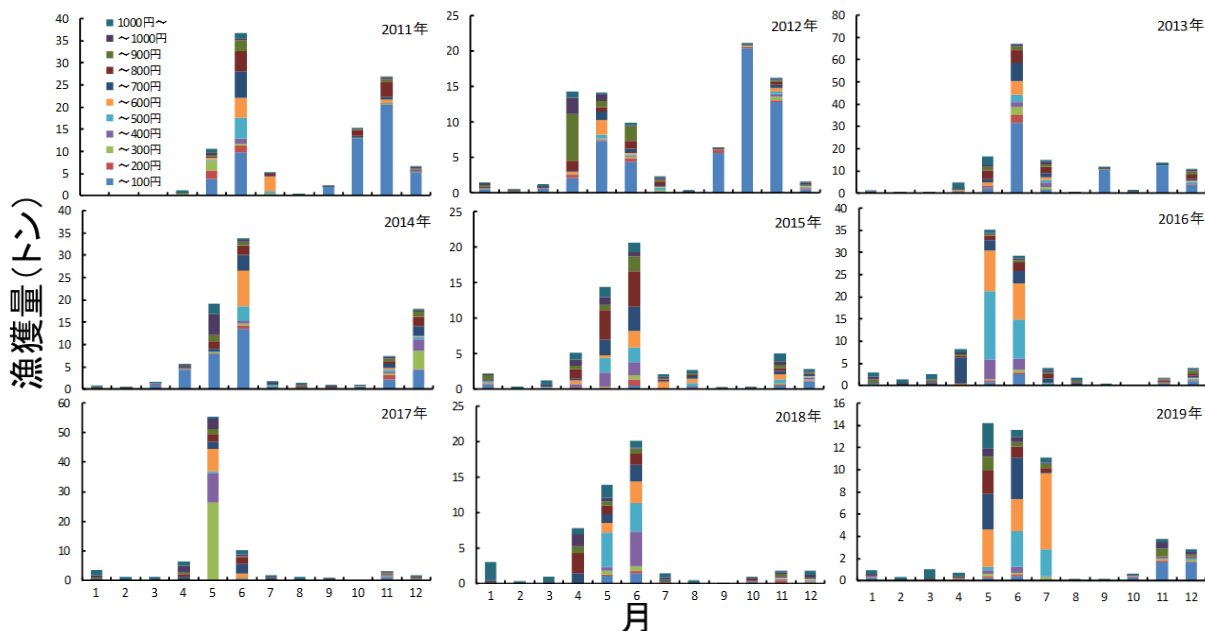


図 19 三重外湾漁協における大型定置網でも漁獲されたイサキの単価と漁獲量の頻度分布図

他海域の状況

令和元（2019）年度資源評価調査報告書によると、神奈川県が低位・横ばい、和歌山県が低位・増加、大分県が低位・減少となっており、すべて資源水準は低位水準となっている（2020年12月9日：<http://abchan.fra.go.jp/digests2019/index.html>）。同報告書における資源回復に関するコメントには、3 県いずれも小型魚の保護が重要であると記されている。

今後の取組

イサキ定置網で産卵期にまとまって漁獲されることから、産卵回遊を行う可能性も考えられるため、イサキを漁獲している千葉県や和歌山県と連携して情報を蓄積・解析する必要がある。また、定置網だけではなく一本釣りの漁獲も多いことから県全体の資源評価を実施するには両者を合わせた解析が求められるほか、定置網では混獲された小型魚が計量されないことも確認されている。このため、実際の漁獲量や小型魚への漁獲圧が異なっている可能性があり、小型魚の混獲情報についての調査が必要であると考えられる。

年齢一尾又長の関係はかなり複雑であることが明らかになったため、年齢査定は引き続き継続する必要がある。漁獲主体年齢や漁獲対象年級群が推定できると漁獲の将来予測につながる可能性がある。長島地区の一本釣りの小型魚保護の取組後、大型魚が増加傾向である。しかし、木村(1984)や耳石による年齢査定結果から推測すると、小型魚の保護を開始してから大型魚になるまでの期間が短い。一方で、イサキの成長は海域により大きく異なり(表1)、長島地区では成長が早い可能性もあるため、適切な資源管理のためには、地区ごとに年齢や成長などの生物情報を収集・解析する必要があると考えられた。

三重県海域において、漁法、漁獲量、対象月、漁獲サイズなどが多様であり、県全体で資源管理を行うことは困難が予想されるが、大型個体の産的価値は大きく、他県の事例も参考にして小型魚の保護を推奨していくことが当面の有効な方策と考えられる。

2020年における定置網の漁獲量は集計中であるが、9月末時点で136トンとなっており、2019年に比べ急増した。漁獲は6月に集中しており、突如として産卵群が来遊したと推察される。定置網による漁獲は近年減少が続いていたが(図9)、急増した背景には海況面も影響した可能性が考えられる。海況と関連付けた解析方法の検討や広域的な小型魚の保護など、本魚種における課題は多く残されている。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、三重大学の金岩稔准教授、東京海洋大学の松井隆宏准教授、国立研究開発法人水産研究・教育機構の黒木洋明博士、三重県漁業協同組合連合会の植地基方氏、三重県水産研究所の青木秀夫博士には資源評価委員会の場で数々のご助言をいただいた。さらに金岩稔准教授には解析手法全般についてご助言いただいた。市場での測定において、三重外湾漁業協同組合、紀南漁業協同組合をはじめとする漁業関係者の皆様には多大なるご協力をいただいた。漁獲量情報の入手に関しては三重外湾漁協の皆様にも多大なるご協力をいただいた。三重外湾漁協和具事業所の皆様、長島事業所の皆様、片田定置株式会社の皆様にはイサキ漁業についての情報を多数頂戴した。三重大学の木村清志名誉教授にはイサキの生態に関する多数のご助言をいただくとともに、文献を提供していただいた。三重県伊勢農林水産事務所の岡田誠氏、三重県水産研究所鈴鹿水産研究室の羽生和弘氏には原稿作成について、ご助言いただいた。三重県水産研究所の森真弓氏、山根りか氏、谷水静香氏には測定補

助や標本の作成、漁獲量データの入力などに多大なる協力をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

文 献

- Doiuchi, R, T. Kokubo and M. Ogawa, 2007: Age and growth of threeline grunt *Parapristipoma trilineatum* along the south-western coast of Kii Peninsula, Japan. *Fisheries Science*, **73**, 777-783.
- 川口和宏・山元宣征(1990a):五島列島北部海域におけるイサキの年齢と成長. 長崎水試研報, **16**, 1-6.
- 河尻正博(1979):標識放流結果からみた東海区沿岸におけるイシダイの移動と回遊. 静岡水試研報, **13**, 61-74.
- 河野光久(1997):山口県沿岸海域におけるイサキの資源管理のための研究. 山口外海水試研報, **26**, 41-53.
- 木村清志(1981):熊野灘におけるイサキの食性. 日水誌, **47** (12), 1551-1558.
- 木村清志(1984):耳石を用いたイサキの年齢と成長. 日水誌, **50** (11), 1843-1847.
- 木村清志(1987):イサキの資源生物学的研究. 三重大学水産学部研報, **14**, 113-235.
- Kimura, S (2018): *Parapristipoma trilineatum*. Kimura, S., H. Imamura, N. V. Quan, P. T. Duang (eds), pp. 164-166. *Fishes of Ha Long Bay the World Natural Heritage Site in Northern Vietnam*, Fisheries Research Laboratory Mie University, Shima, Mie.
- 木村清志・鈴木清(1981):熊野灘におけるイサキの成熟と産卵. 日水誌, **47** (1), 9-16.
- 久保田 洋(2019):産卵生態. 虫明敬一(編), pp. 49-58. *ブリ類の科学*, 朝倉書店, 東京.
- Kumagai, K, A. A. Barinova, M. Nakajima and N. Taniguchi (2004): Genetic diversity between Japanese and Chinese threeline Grunt (*Parapristipoma trilineatum*) examined by microsatellite DNA markers. *Mar. Biotechnol*, **6**, 221-228. DOI: 10.1007/s10126-003-0006-8
- 増沢 寿(1967):イサキ資源に関する研究—I. 年齢と成長について. 日水誌, **33** (9), 812-817.
- 松宮義晴・高橋勝宏(1983):平戸島志々伎志摩におけるイサキの食性. 西水研研報, **59**, 23-32.
- 三重県水産研究所(2008):平成19年度漁況海況予報関係事業結果報告書(漁海況データ集). 三重県水産研究所, 200 pp.
- 佐藤浩一(1971):イサキの成長について 鱗による年齢査定. 静岡水試研報, **4**, 19-23.
- 島田和彦(2013):イサキ科. 中坊徹次(編), pp. 940-945.

- 日本産魚類検索全種の同定 第三版, 東海大学出版会.
秦野.
- 渡辺健一・岡崎孝博 (1999a) : 徳島県沿岸のイサキの年齢
と成長. 水産増殖, **47** (3), 349-353.
- 山田英俊・片山知史・高田淳史・安楽康宏・真田康広
(2011) : 豊後水道西部海域におけるイサキの年齢と成
長および漁獲物の年齢構成. 水産海洋研究, **75** (3),
161-169.
- Yokogowa, K (2000): Morphological and genetic difference
between Japanese and Chinese threeline grunt
Parapristipoma trilineatum. Fish Genet Breed Sci, **29**, 49-
60.
- 吉松隆夫・光永直樹 (2000) : 飼育条件下における中国産
イサキ仔稚魚の成長と形態的特徴. 九大農学芸誌, **54**,
121-131.